

申込事業計画説明及び質疑応答まとめ

(1) いきいき六郷運動教室

【プレゼン概要】

東日本大震災により被害を受けた東部沿岸部のコミュニティの活性化及び介護予防運動の推進を目的に体操教室の運営及び各種イベントでの体操披露を行う。体操教室を通して、震災後に離れ離れとなった地域住民の交流の場を作り、高齢期を元気に楽しみながら心身共に安心して生活できる体力づくりを行う。

【質疑概要】

Q 毎月2回の開催で13:30から15:00までとあるが、お茶会などの交流はあるのか

A 毎回ではないが、体操を早めに終わらせてお茶会を行ったりすることもある。

意見 会員を増やすために、色々なイベントで体操を披露して募集することも大事だが、会員一人ひとりが、知り合いの方を連れて来て、お茶会などの交流の場で絆を深めることで、会員になりたいと思う方が増えるのではないかと思う。そうした場合、体操だけでなく、コミュニケーションが取りにくいところもあるので、スキルアップも大事だが、交流の場を作って、会員を増やしていく仕掛け、仕組みを考えてほしい。発表にウエイトを置いてしまうと、健康体操やストレッチは好きだけど、人前に出るのは得意でない方は入りづらいので、バランスをとったほうがよい。

Q 事業計画書の広報の中で、関係団体等の機関紙、会報、新聞等への掲載とあるが具体的にはどういったことに取り組んでいるのか。

A 一般社団法人 ReRoots（若林区東部にて農業とコミュニティの再生に取り組んでいる）の会報誌へ、本活動の取り組みを掲載してもらえるようお願いしており、その他にも掲載をお願いできる場所を探している状況である。

Q 今年度の実績報告会の中で、各大学の学生を取り込み、何か新しい方向を検討したいと報告を受けたが、具体的にはどのように考えているか。

A 今年度の体操教室の中で、一緒に体操をしたいと学生の方がいらしたことがあり、そのときに、交流の場を作りたいと学生の方に話をしたことがあった。その後連絡はないが、他の大学へも自分たちの活動の中で、何か一緒に出来ることがあればと働きかけを行っていきたい。

Q まちづくりの観点から考えると、本活動がどのようにまちづくりに繋がっていくかという見方が必要である。外に出て、東六郷コミュニティ・センターを知ってもらうだけでなく、体操教室の会員の方やコミュニティ・センターを訪れた方に、地域を知ってもらい、地域づくりに関心を持ってもらえるかが大切だと思っている。例えば体操教室の会員の方が地域を歩いて地域を知るとか、イベントで集まった方たちに自分たちの地域のことを知ってもらうなどの機会はあるかどうか、また今後機会をつくる考えているか。

A 東六郷小学校跡地に賑わいづくりのコーナーや施設が建つ予定で、そこができあがれば、多くの方に東六郷地域へ足を運んでもらえると思う。コミュニティ・センターに防災タワー、そして東部かさ上げ道路も開通して、開けた街になってきたので、そこにプラスして私たちが地域を活性化していければと思う。体操教室を通して集う場所が出来たので、地域の素晴らしさをみんなに知ってもらいたい。

Q 収支予算書内の活動資材費について、昨年イベント用にTシャツを作製したと思うが、来年度も新たにイベント用活動着を作製するということが。

A 別のデザインのものを作製する予定である。

Q 将来的には外部講師には頼らず内部で運営していきたいとのことだったが、そのときに想定されるリスク、これまでの自分たちの活動と変わってしまうなど危惧される部分とかがもしあれば教えていただきたい。

A 会員同士でコミュニケーションを取りながら、得意な方に活動のリーダーを務めてもらえれば、あまり心配はいらないと思う。先生に頼りすぎてしまうところがあるので、何回かに1回は講師をお願いするが、今年からは会員の方にもレベルアップ講習に出ただけなのでステップアップを図れるかと思う。講習を受けていない会員にも順次うけてもらい、その中である程度みんながレベルアップできれば、交代で講師を行うことも考えている。

意見 アイディアベースではあるが、自分たちだけでなく、子どもたちと一緒に活動してみることでも考えてみてはどうだろうか。子供たちの活動と自分たちの活動をうまくコラボさせ、その発表会を一緒にやることによって、参加した子どもの祖父、祖母も見に来るだろうし、それを見て子供たちと一緒にやれるのであれば自分も参加してみようかなと広がっていくのではないか。

意見 学生との活動について、ボランティアセンターなどに話を持っていき、体操教室に常時来てくださって大丈夫ですというと、各大学の学生ボランティアが来てくださり、一緒に活動することも可能である。一緒に活動することで活気もでるし、大学生も地域包括ケアということで、特に東北福祉大の方はそういった活動をされているので活用していただければと思う。また、地域包括のケアマネジャーでは、介護予防関連の情報を必要としているので、本活動についても情報提供をしておくといいと思う。自分たちだけでホームページへの掲載などはなかなか難しいと思うので、そういったところに頼ることもできる。地域の活性化のために必要な活動であると認めてもらえるものだと思うので頑張ってください。

【プレゼン概要】

若林区の魅力発信、まちの賑わいづくりを目的に地下鉄・バス沿線を利用した市民参加型ウォークラリーイベントを開催する。地下鉄・バス沿線をすごろくに見立て、サイコロを振り、出目通りの駅で下車して出題された目的の飲食店などが記載された地図を見ながら、飲食店を探し出し、その店の逸品を食し、再びサイコロを振り、次なる目的地を目指す体験型ゲームを実施する。

【質疑概要】

Q 参加人数について、1回の開催で30人ということは、親子であれば15組くらいということか。

A 一応30人としているが、運営側のキャパの範囲内であれば、応募が40人、50人であっても、その人数で実施しようと考えている。

Q 一番早くゴールした人が景品をもらえるということだが、早くゴールしようとなると、せっかく目的地のお店を訪ねても、交流もそこそこに急いで次へ向かって落ち着かない状況になることが懸念されるので、例えば、標準時間のようなものを設けて、その時間に一番近かった人が景品をもらえるようにするなど、景品についてはもう少し考える必要があると思う。

A ご意見の通りで、時間を競ってしまうとそのような事態になりかねないので、標準時間などを設けてもいいかもしれない。ただ、時間で競うことは、あまりにも遅いチームがいて、イベント終了時刻を過ぎてしまうことを防ぐ意味合いもあるので、そこは上手く調整していきたい。

Q 一日乗車券の費用について、参加者の負担はなしということで検討されているが、何か理由はあるのか。

A 参加者の負担軽減からである。食べ歩きの要素が加わることで、それぞれ行ったお店での飲食費がかかるので、その負担を軽減するためである。

意見 イベント当日のボランティア支援員の昼食代と交通費が1回あたり8人で計算されているが、このような広域にわたるイベントとなればもう少し人手が必要になってくるとも考えられるので、一日乗車券は参加者負担にして、人件費のほうに回してもよいのでは。

Q 安全面に関して、運営スタッフの帯同とあるが、実証実験のなかで、運営スタッフが帯同しないと安全面で不安があると判断したのか。

A 実証実験では、参加者が大人だけだったので、安全面で不安なところはなかったが、子どもの参加を考えると、親と一緒にだとしても、手を離れて道路に飛び出したり、若干の不安があると思ったのと、帯同スタッフの目的のもう一つとして、ゲームの公平性を保つためでもある。例えば、サイコロを振って出目の数を誤魔化したりするのを防いだりするためである。

Q 一番の目的は食にポイントを当てて、その魅力を体感していただきたいところかと思うが、地下鉄の乗り降りの時間だったり、地域についても知ってもらいたい、お店を見つけるためのゲーム性だったり、少し詰め込みすぎの印象を受ける。ゲーム性の部分

が強くでているために、肝心の食を楽しむ、お店の背景を知るなどの要素が見えづらいうようになってきているように思うので、少し整理したほうがよい。そういった中で、降りる駅を減らしたり、限定するといったことは検討可能か。

- A すべての駅を利用するのが困難であれば、行けなかった地域、お店があれば2回目で重点的に取り扱い、訪問してもらうなどの対応は可能である。
- Q お店の方との交流や、クイズ性といったところであれば、お店に行ってそのお店の中でクイズを出すようなことは考えているか。例えば、食材に秘められた秘話などをお店に行ったことでわかるみたいなゲームの楽しさを出してみてもどうか。
- A 取り入れたいと思う。それぞれのお店にはそれぞれの歴史やストーリーがあると思うので、そこについては、お店にお伺いして話を聞いて、今回の事業の目的を伝えたくて参加していただきたい。

(3) 貞山運河の舟運プロジェクト

【プレゼン概要】

昭和 30 年から 40 年初めまで貞山運河の閑上から塩釜間を動力船が就航していた歴史があり、貞山運河の舟運を復活させたい。貞山運河沿いは、東日本大震災の津波により大きな被害を受けたが、荒浜から閑上間の舟運を復活させることで、運河沿いの賑わいづくり、地域の魅力向上を図る。

【質疑概要】

- Q 1 回の舟運の参加者の想定が 10 人とのことだが、紹介の中にあったフットパスなどはかなり多くの方が参加されているので、10 人という関係者のような方だけで定員になってしまうのではないかと。
- A 舟運を予定している区間には、障害物や土砂が堆積しており、浚渫（機械を使って運河の土砂などを取り去る土木工事）が必要である。25 人乗りの舟で就航できればよいのだが、安全面を考えると 10 人乗りくらいの舟になると思う。県の河川課などの関係各所と協議をしているがまだ浚渫が終わっていない状況なので、船会社と確認をしながら 25 人乗りの舟でどこまでいけるかについては検討が必要である。
- Q 事業計画は一年間の計画だが、イメージとしては何年か続けていくことを前提に、今年の実験的な位置づけとなるのか。
- A 昭和 40 年代頃から舟運はされていないので、復活させることは大きなプロジェクトになると思う。この取り組みの中で行政及び藤塚の事業者の方へ市民団体として提言していきたい。
- Q 事業を継続させていくことを考えると、舟を動かすだけで 30 万円の費用がかかるのに対して乗れるのは 40 人くらいとなると継続していけるかどうか疑問に思うが、どのような計画の中での今年なのか。
- A 舟を運航するとなると、棧橋の準備や、保険の加入などの経費が掛かるので、一日に何往復かするなど舟運回数を増やしてたくさんの方に乗船していただくことが必要になってくるので、募集までの間に調整しながら、できるだけ多くの方に乗ってもらえるように頑張っていきたい。
- Q 8 月、9 月の舟運を予定しているが、台風などの予期せぬ事態の際は日程をずらして再度計画できるものなのか。
- A 8 月、9 月の時期は舟運を行うのにちょうどよい潮の高さなのでその時期としているが、船会社との調整の上、9 月を 10 月に延期するなどの検討は可能である。

【プレゼン概要】

地域の活性化を図ることを目的に、荒町エリアの魅力を発信するツールとしてフリーペーパーと動画の制作を行う。フリーペーパーについては、昨年度に制作した「荒町さんぽ」を編集し、新たに取材した記事を入れた第2号の発行のほか、新たに連坊や愛宕橋エリアを加えたまち歩きマップを作製する。動画制作については、荒町商店街を発信する動画チャンネルを立ち上げ、第一弾は荒町を象徴するお祭り「毘沙門天王祭」に焦点を当てた映像を制作する。

【質疑概要】

- Q 制作した動画のWEBでの公開というのは、インスタグラムなどのSNSに載せるようなイメージか。
- A YouTubeのチャンネルを立ち上げて動画をアップしていくことを考えている。その他、荒町エリア発信隊のSNSページ、Hostel KIKOのHP、個人のインスタグラム等でも発信していきたい。
- Q 昨年度の荒町さんぽでは取材したお店全てを掲載したのか。掲載できていないお店もあるのか。
- A 掲載できなかったお店もあるので、第2号にて掲載する予定である。また第1号で拾いきれなかった部分についても反映させていきたい。
- Q 荒町商店街振興組合副理事長がお見えになっているが、商店街側から見て、今後荒町エリア発信隊へ期待していることや望んでいることはあるか。
- A 各店主からはすごくいいものを作っていたという声を聞いている。また先月、連合商店会の新年会があり、各商店会の中でも荒町さんぽが話題となっており反響があった。3年後には東北学院大学の新キャンパスが市立病院跡地に開設する予定なので、そこの繋がりや高まりを期待している。
- Q 昨年に引き続き活動的に取り組んでいる印象を受けた。説明の中で企業からの協賛が期待できるかもしれないとのことだったが、具体的にこういった形で実現が可能か教えていただきたい。
- A まだ確実にいただけるかどうかは見えていない状況である。来年度動画を制作して、編集スタッフのチーム力をご覧になっていただき、ぜひうちのお店も制作してほしいといった状況になるのではないかと期待をしている。
- Q 東北学院の学生と一緒に進めていくということで、大学の授業の一環として関わっていくのか、そのあたりを教えてください。
- A 東北学院大学との連携については、具体的に授業の一環などの話はまだ進めてはいないが、先月の荒町さんぽのお披露目会の際に、学院大の事務局の方と話をし、協賛として関わってほしいという話があったので、改めて来年度の学院大とのかかわりについて話を進めていく予定である。

【プレゼン概要】

来年は東日本大震災から 10 年目の節目にあたり、震災で甚大な被害を受けた仙台市若林区沿岸部地域は、住民と地域コミュニティそして多様な外部とのかかわりを経て復興への道のりを歩んできた。その道のりは同じ沿岸部であっても一様ではなく、それぞれの地域が歩んだ「そこにしかない物語」を記録化し広く発信していくことを目的に、若林区沿岸部の震災復興の記録をまとめたパネル展を開催する。

【質疑概要】

- Q 震災のことをしっかりと当事者目線で発信していくことの意義は理解できるが、まちづくりにつなげることでいうと、具体的にどのようなつながっていくかまだ見えない部分がある。これまで色々な方に話を聞いてきたと思うが、これまでのヒアリングのなかで、震災を振り返った話を受けて、これからのより良いまちづくりにつながりそうだと感触が得られた経験はあったか、また今後そのようなことが期待できる実感はあるか。
- A ヒアリングをする際に、外部の方に聞いてもらうことで、同じ地域や身近な人では引き出すことのできない話がでてきたりすることがある。その中で自分の住んでいる地域について改めて考えるきっかけとなることもある。被災地として可哀想にみられているのではなく、この被災地で様々な賑わいが生まれていることを伝えていくことでプラスの視点でとらえていくことが大事だと実感したことがあった。
- Q 経費をみると、大半がパネル製作にかかる費用となっているが、具体的にパネルの内容はどのようなものなのか。
- A それぞれの被災地域から聞き取った内容は、膨大な量であり、それを分かりやすい形で伝えていく手段となると、なかなか難しく、自分たちの活動の課題となっていたところである。この取り組みの目標でもある、世代や地域を超えて発信していくことを考えると、WEBサイトやSNSでの発信の他に、分かりやすくまとめたパネルを作製し展示して、それを見た方の声を吸い上げる形でやっていきたいと考えている。そのため、パネルに力を入れるために、そのような経費の計上となっている。事業名のとおり、あくまで 10 年誌として残すことが目的なので、その一歩として、パネル展の形をとることでさらに色々な人たちの声を集めるための手段としてとらえている。
- Q パネルには写真だけでなく図や表なども入れるのか
- A はい。これまでの聞き取りを具現化することを検討したときに、図示することで沿岸部の多様な地域の比較がしやすくなる。図や表などを使いながら聞き取りをした際に、話をする相手側も頭がすっきりして、整理しやすくなった経験もあったので、当時の記憶を喚起するためのパネルと考えたときには、画像だけではなくて図であったり言葉であったりそういったものもうまく活用していきたい。
- Q 作成したパネルは、市内、県外、全国など色々なところでの展示も視野に入れているのか。
- A はい。集めた記録はその地域の物語ではあるが、しかしそれは、他の地域で生きていく上でも通ずる普遍性や共通性があるものだと考えているので、そういったものを広く発信して多くの方に見ていただきたいと考えている。
- Q 10 年という大きな節目にパネルを作ることを考えると、多くの地域の方からワークショ

ップ形式でお話を聞くには、タイトなスケジュールになると考えられるが、回数や具体的なヒアリングの人数などはどのように考えているのか。

- A このヒアリングに関しては、一から行うものではなく、これまでメンバーが、それぞれの地区に深く関わって、得ているものがあり、そういったものをみなさんに見てもらいながら、そこから言葉を引き出すというような手法を考えている。ある程度の下地がこれまでの蓄積の中で出来ていることを前提にヒアリングを実施していきたいと考えている。またヒアリングの対象となる方たちとの関係性もできている状態で行うので、それを踏まえてタイトなスケジュールで組んでいる。

意見 10年の節目ということで全国の方がご覧になることを想定すると、各論よりかは総論としての結果ととらえる方が多いと思うので、漏れがないように、主観的ではなくて客観的にまとめていただきたい。また町内会や各団体が出している機関紙などの情報からの紹介もあると丁寧かなと思う。

- Q 収支予算書のパネル製作費1枚 15,000円はざっくりした金額に思えるのだが、これの内訳はどのようになっているのか。

- A より分かりやすく伝えられるように、デザイナーさんに依頼することを考えているので、デザイン費も含めた金額となっている。